

# たね通信

2020年10月 No.

発行 地域生活ケアセンター  
小さなたね

【医療法人にのさかクリニック】



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス (ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈)

世界中に広がった新型コロナウイルスの猛威は、最近の感染者が減少しているとはいえ、現在も社会活動に大きな影響をもたらしています。コロナ時代の「新しい生活様式」は、手指消毒とマスク着用を習慣化させ、「ソーシャルディスタンス」(社会的距離の保持)は、もはや日常の光景となっています。一方で、この世界的なパンデミックは、社会に潜在化する差別や孤立の問題を浮き彫りにしたとも言えます。見えないウイルスに対する人々の不安は、心の中に疑心暗鬼を起させ、攻撃的となり、あちこちで差別的な言動や行動が顕著に見られました。そうした中で、人々による差別と向き合い、一人一人が「当事者」として考える機会を起こさせてくれた出来事もありました。



ここから何が見えるかな？

私はそのやり取りをテレビで見ながら、彼女の「問い」は自分にも向けられていると感じました。遠い海の向こうで起こっている差別問題を、どこかで「対岸の火事」として傍観していた私に、「いや、あなたも

## 差別を越えて向こう側へ

先日の全米オープンテニスで優勝した大坂なおみ選手は、アメリカ各地で黒人差別によって犠牲となった一人一人の名前を、試合会場で自らが使用するマスクに記して登場しました。優勝インタビューの中で司会者から「どんな気持ちで、あのマスクを着けていたのか？」と聞かれ、「では、あなたは何を受け取っていたのか？」と問い返した

所長 水野 英尚

## たねスタッフのつぶやき

はじめまして、9月から小さなたねで働くことになりました福島です。もうお会いした方も多いと思いますが、色黒でひよろつとした39歳です。

現在、能古島(行ったことのある方は多いと思います)のみかん畑の中に家を借りて住んでいて、毎日えっちらと船に乗って通勤しています。ちなみに我が家はお風呂は薪で、トイレはぼっとんです。お休みの日にせせとお風呂用の薪を集めたりしています。

前職は、南区にある障害者の居宅介護事業所で、約15年勤務していました。基本的にのんびりした性格です。少しづつ皆さんのことを知って、仲良くなりたと思っています。そして、日々の生活を皆さんと一緒に楽しんでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。



福島康丈(介護スタッフ)



## 医療法人にのさかクリニック

### 地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0171  
福岡市早良区野芥4-19-31  
電話 092-834-8090  
FAX 092-834-8091



### 地域生活応援 たねプラス

〒814-0172  
福岡市早良区梅林6-23-3  
電話 092-874-3051  
FAX 092-874-3052



▷Eメール chisanatane@tune.ocn.jp

▷ホームページ  
<http://chisanatane.blog.ocn.ne.jp/blog/>

「当事者」なのだ」と突き付けてきた、カウンターコメントでした。

「人種差別」などと言われると、日本に住んでいる私たちは、どこかで「ひどい感」を抱いていないでしょうか。ある文具メーカーが色鉛筆やクレヨンに「肌色」の表記をやめたとき、指摘した人たちに「言葉狩りだ」と批判が起きました。子どもの頃から慣れ親しんだ呼び名に愛着を感じる思いがあるとはいえ、日本社会に根深くある、あいまいな表現、「みんな一緒」「だいたい同じ」という意識が、周囲にいる多様な肌の色を見えなくさせ、差別に対する無感覚を生み出してきたのかもしれない。

「障害」という言葉もまた差別の温床になっていると言われます。学校に通う子どもたちの中で、支援学級や支援学校に通う子たちを「ガイジ」（害児）と呼ぶことがあるそうです。「障害」という、社会に障（は）りがあり、害のある「迷惑な存在」という意識が、様々なものを吸収しながら成長していく子どもたちにすり込まれています。

先日の報道で、沖縄の公立小学校の教員が、支援学級の子どもが騒いだため、子どもたちに「うるさいと思う人、邪魔だと思う人は手を挙げて下さい」と呼びかけ、手を上げなかった児童に「あなたも支援学級に行きなさい」と言ったと

たち自身の多様な出会いは削がれています。面倒なことや、自分の思うように行かないこと、たとえ、あいつは迷惑な存在だ」という感情を抱いたとしても、それを排除の対象と捉えるのではなく、共存への知恵を探り考える経験こそが、生きた教育というものではないでしょうか。子どもたちにとって、そうした学びの場所が失われていけば、「人に迷惑をかけてはいけません」「迷惑をかけないように生きましょ

う」、それが至上命令となり、それを守ることでできない人たちは、ダメな人間で、社会の役に立たない存在と位置付けられて、価値のある人間とそうではない人間という価値基準が生まれてしまうことでしょうか。

今年の7月、京都市内のALS患者が、SNSで知り合った医師二人の手を借りて「安楽死」を遂げていたと報道され、この医師らは「囑託殺人」として逮捕

の報道がなされていましたが、まさに教育者自身が「みんな一緒」「だいたい同じ」の意識の中、何の疑問も持たずして教育の在り方を進め、そこからはみ出してしまっている存在は、「シン」や「トクベツ」のもとに、別の場所に追いやられなくなり、迷惑な存在」として教育され続けていくとするなら、「障害」による差別は人々の心に植え付けられ続けていくのではないのでしょうか。

生きた教育をしていくには、出会いと経験が必要であることは言うまでもなく、互いに過すという時間が必要です。しかし、「障害」の種別や特性においてカテゴリーズされた現在の教育制度や仕組みでは、「大人」たちの手厚い支援は受けられたとしても、子ども



もしかしたら、  
ウイルスよりも  
恐ろしいもの。

されましたが、この事件により「安楽死」をめぐる議論が活発になっていきます。この病に罹患した多くの患者の証言から、女性の「死にたい」という願いは心の底から理解できると言います。その一方で、殺害した医師は主治医でもなく関りも無かったことから、今回は「安楽死」でなく「殺人」だと糾弾されています。彼女の「生きる」に係わって来られた家族や支援者一人一人の無念さは、いかほどのものであったことかと思えます。

当事者として、彼女の喪失感や絶望感を他の誰かと比較して、死を望むことは間違だと責めることなどは誰にもできないことでしょうか。しかし、彼女がもし、「こんな状態になって、人の介護を受けて生きていくことに何の価値も見いだせない」と考えていたのなら、「それは違う！」と言いたい。なぜなら私の周囲には、そのような状況の中で潔くらいに、他者の介護を受けつつ、喚（こゑ）いたり愚痴を言ったりせず、「凜」として自分を保ちながら過（すご）している人たちがいます。その姿はまさに「いのちの尊厳」を示す光のようです。私たちは何かをするから価値があるのではなく、まさに一人一人に与えられている「いのち」に価値があることを示す光です。「差別」を乗り越えて向こう側に行くためには、そんな気付きから始まるのだと思います。





かけがえのない時間



初めまして。今年の1月より入職しました大岩と申します。  
私は今まで呼吸器や泌尿器科、皮膚科などの外科病棟を中心に経験し、こちらに来る前の3年間を緩和ケア病棟で勤めておりました。どの分野でも沢山の方、そして沢山の人生との出会いがあり、かけがえのない私の人生の糧を得ることができました。もともと緩和ケアに携わりたく看護師の道を選んでいたこともあり、緩和ケア病棟での時間は、自分の人生にとってもとても濃い時間でした。自分の死生観、人生観を見つめながら、患者さんとご家族、そして遺族の方達と語り合う。とても対等な立場で、看護する側、される側に関係なく語り合う時間はとても貴重な経験となりました。そんな中、見えてきた一つの事柄が、在宅で過ごすことでの不安や課題でした。様々な条件を抱え、ご本人や家族の生活スタイルを見直さなければならない状態で在宅で生活をしていくこと。その不安は、それまでの私にはきちんと想像ができておらず、在宅ケアについて関心を持つきっかけとなりました。

そのような中で、にのさかクリニックや小さなたね、たねプラスの存在と取り組みに出会い、在宅で過ごす方達の中には、私はまだ出逢わなかったような方達も沢山いるということを知りました。私はもっと色々な方と出逢い、学び、共鳴したいと感じました。そして、これから出逢う利用者さんやご家族とどんな関わりができるんだろう。きっとまたかけがえのない時間になるんだろうな。そういう思いで勤め始めました。

入職してコロナによる閉所もありましたが、早8カ月が経ち、いつも利用者の方達の素直な反応に驚かされ、笑顔をもらい、癒されています。まだまだ学ぶことも多くありますが、精一杯関わられたらと思いますので、どうぞよろしくお願いたします。



大岩 ひかる (看護師)

『やまゆり園事件』

神奈川新聞取材班 著

2016年7月26日未明、神奈川県相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で、入所者19人が死亡、職員2人を含む26人が重軽傷を負った「やまゆり園事件」。元職員であった当時26歳の植松聖に、今年死刑判決が下った。

これで事件は解決したと言えるのか？  
地元記者による4年間の取材記録は、この事件の「問い」を私たちに突き付けてくる。



(幻冬舎 / 1800円+税)

おしらせ

たね通信がリニューアルします！

発行が滞りながらも続けてきた「たね通信」ですが、今号で50号となります。これまで「コラム」を中心に「障害」や「福祉」というテーマを取り上げてきましたが、今回をもって紙媒介の発行から、ホームページまたはFacebookなどを利用した「web版」として、装いも新たな通信を発行していきたいと考えています。

内容は、小さなたねやたねプラスの様子、スタッフ目線で感じたことなどをお伝えしたいと思いますので、リニューアルした通信を楽しみにしててください！